

気仙沼プロジェクト 8月26～9月1日・活動報告

1.参加大学・人数

東北学院大学・桜美林大学・麗澤大学・明治学院大学・関西学院大学・立命館大学・
大阪府立大学 計 42名

2.活動内容

瓦礫撤去、写真洗浄、古美術品修復、アンカー作り、流出した本のリスト作成など
詳しい作業内容については、前クール（8月20～25日）の活動報告と重なるのでそちらを参
照していただくとして割愛させていただきます。

3.この活動を通して感じたこと

8月26日～9月1日の活動には、明治学院からは10名が参加しました。以下はその10名の
それぞれ感じたことについて素直な気持ちです。不謹慎な内容があるかもしれません。予
めお詫び申し上げます。

私は気仙沼プロジェクトでリアスアーク美術館の作業に参加しました。この作業の魅力
は常に現地の方とお話ができるという点でした。椅子に座って、津波で流されてしまった
本や日記についたドロをハケで取り除く作業のため、黙々と作業をするのではなく現地
の方とコミュニケーションをとりながら仕事をしよう！と私たち学生は決めていました。初
日は緊張もあったせいかなかなか上手くお話することができませんでした。また、震災の
話をしてくださったときにどのように反応したらいいのかわからなかったのが正直な意見
でした。その日の反省の中で、被災したときの話ばかりでなく私たちの話（地元の話など）
を積極的にしようとお話し合いで決めました。なぜなら、私たちの地元の話をした時に現地
の方々がとても興味をもってくださったからです。私たちが今できることは、現地の方を
私たちの話で少しでも元気になって、笑顔になってもらうことだと思いました。こうした
お話をしていくうちに、口数が少ない方とまでたくさんお話をすることができました。ボ
ランティアとは作業だけでなく、こうした現地の方とのコミュニケーションで一人でも多く
の人に元気になってもらうこともとても大切だなとこのリアスアークでの作業を通じて感
じました。

4日間という短い間でしたが、現地の方とても仲良くなれたため最後のお別れのとき
は学生全員が涙を流していました。それほどこの4日間で得たものは大きく、充実してい
たと言えると思います。最後に現地の方が、震災で亡くなった人はたくさんいるけれどこ
の津波のおかげで私たちは会うことができたとおっしゃってくださったのが印象的でした。
また、こうして家族に囲まれ恵まれた生活が送れていることに日々感謝しなければならな

いということを改めて教えていただきました。

5泊6日は長いようであったという間でしたが、本当にこのボランティアに参加できてよかったです。私にとってこれから自分には何ができるかということを考えさせてくれるきっかけになり、他大学の学生の行動力に圧倒されたりととても良い刺激をうけることができました。本当にありがとうございました。

国際学部 加藤

私はこのボランティアに応募したとき、まだまだボランティアを必要としている場所、人が多くあると聞き、微力ながら少しでも役に立てることができたらいいなと思っていました。また、一人の日本人として、この震災の現状を知りちゃんと受けとめたかったのと同時に、こうしたボランティアは、行動力やコミュニケーション能力が必ず必要になると思い、自分に足りない部分の成長にもつながると考えたので参加しました。

現地に着いた初日、目の前にはメディアだけでは到底わからない被災地の光景が広がっていました。しかし、震災前のことをあまり知らなかったので、行く前に調べておけばもっと理解が深まったのではないかと後悔しました。魚町では、被災された方々との作業や交流ができました。東北地方には自分と同じ名字の人が多く、祖父も宮城出身で、何らかの血縁上の繋がりがあるのは知っていました。そこでも千葉さんがおり、お話をさせていただき、さらには個人的にお宅にもお邪魔させていただくなどの交流ができ、大変嬉しく思いました。千葉さんは震災当日が誕生日で、ご家族が「3月11日に生まれた人はこんな変な人が多いんだよ。だからこんなことが起きたんだ。」と、笑いながら仰っていたのがとても印象に残っています。

また違う場所では、他のボランティア団体と一緒に作業する機会がありました。そのなかには地元が同じで、さらに私のことを知っていた2人と作業中に知り合うという偶然の出会いもありました。鮎立の民家の中の清掃では、家主の意向により家の中の物を全て処分してほしいとのことで、仏壇や思い出の品を集積所へ運ぶのは非常に精神的に辛かったです。そこには、家の物を見ただけで震災の恐怖を思い出してしまうといった、被災者にしかわからない思いがあるのでしょうか。しかし、作業を共にした他のボランティア団体の方に、このような辛いことを受けとめるのも大事だが、どうせ作業をするのなら楽しくやった方がよいということも教わりました。

今回のボランティアを通じ、これからの日本を担っていく世代として、様々な人と接し、また震災の現実を少しでも知ることができたのは自分にとって良い経験になりました。そしてこのボランティアは、大変なこともありましたが、不謹慎かもしれないけどとても楽しいものになりました。自分次第で気持ちも被災地も変わると思います。一方で、メディアでの震災関連の報道は徐々に少なくなってきており、また被災地が観光地化してしまっている部分もありますが、被災者にとっては震災は未だに続いていることを忘れてはなり

ません。私はこれからも、ボランティアという枠に縛られず、身近で小さな支援になることも探し実践をしていきたいと思います。

経済学部 千葉

今回初めて長期間にわたってのボランティアに参加しました。最初は不安だけでしたが、現地の方々が辛い震災を乗り越えて前に向かって一生懸命進んでいる姿を間近でみて、自分にできることを短い期間だけれど精一杯やろうという気持ちがさらに強くなり活動に取り組みました。テレビを通して見ていた被災地の状況を直でみてなんとも言えない気持ちになっていましたが、現地の方が私たちのような若者が遠くからやってきてくれて笑顔がみれて元気がもらえると行って下さり、そういう面でのお手伝いも出来るのだと今までのボランティアに対する考えが自分の中で変わったような気がしました。私は四日間リアスアーク美術館で作業をしました。一緒に作業していた地元の方たちが震災があったからこその出会いだと言って下さったことが心に残りました。また、震災についての話だけでなく皆で共有できる面白い話題作りをすることもこういう時には必要だと思いました。ぜひまた時間があるときには積極的にボランティアに参加したいと思っています。

法学部 櫻井

私は、今回のボランティアで瓦礫撤去を2日間、写真洗浄を2日間、被災地視察を1日行いました。瓦礫撤去では気仙沼市街地を行いました。一緒に作業をして下さった現地の方々は本当に優しく接して下さり、自分達がボランティアに来ている側なのに毎回差し入れを下さり今まで感じたことのない温かさを感じました。2日目になると慣れない作業で足や腰に痛みも感じ、日差しも強かったので辛く感じてしまった時もありましたが、終わった後にヘドロを取り除いた隙間から水が通るのを見て嬉しくなりました。帰りの時間に、陸前高田の視察ができました。3日目には1日生活班としてお休みを頂き、東北学院大の先生と次のクールのボランティア活動の打ち合せの為に気仙沼の齋藤さんの家で被災した時の状況や現在の状況を聞くことができました。その後南三陸町の視察に行くことができました。南三陸町は気仙沼と比べ、津波で残っている建物がほとんどありませんでした。また、テレビで放映されていた防災庁舎の前にも行くことが出来ました。防災庁舎の前にはたくさんの千羽鶴やお花、そして息子さんをその建物でなくした親の手紙が置いてありました。最後まで避難の放送をしていたアナウンサーの方は本当に勇敢な女性だったのだと感じ私だったら逃げていたと思います。4日目5日目は写真洗浄を行いました。様々な写真があり、海水の影響で水につけてこすった途端、消えてしまう写真が多くありました。写真に写っている方々にとって被災した写真は本当に思い出の大切なもので今もどこかで探している方がいると思うととても心が痛くなってしまいました。

今回ボランティアに参加し、とても良い経験ができたと思います。テレビでは感じられないような経験もでき、被災地の方々の大きな温かさを感じることができました。今回だけでなく、これからも継続してボランティアをしていきたいと感じ、また気仙沼のボランティアで出会った現地の方々とお会いしたいと思いました。

最後に、生活班のお手伝いをして下さった三角先生、たくさんのお話を聞かせて下さったボランティアセンター長の原田先生ありがとうございました。

法学部 柴田

夏休み前にボランティアの募集をしていたときに、それまで募金しかできていなくてもどかしさを感じていたので直接現地で力になれるなら、と思い特に深くも考えずに応募しました。しかし実際に参加できると分かり出発の日が近づくにつれて、現地では様々な思いの方が過ごしているのに、自分がこんな生半可な気持ちで参加して良いのかなと不安になりました。そんな気持ちのまま現地に着いて、まずはじめに感じたことは、まだまだ復興には程遠いじゃないかということでした。少しずつ復興してきているというテレビ等の報道から、もっと元々の気仙沼を想像できると思っていた自分の考えの浅はかさに恥ずかしくなりました。原形を留めているものが僅かしかなく、想像していた以上の被害の甚大さに驚いたと同時に、津波の力、自然の力の強大さを痛感しました。

いざ作業を始めると、まだまだ大量の力仕事があり、ボランティアニーズとボランティアの数との差を感じました。私たちが作業をした魚町ではボランティアを受け入れたのは今回が2回目と聞き、震災からの約半年間で重機を抜いた作業のほとんどを地元の方々だけでやったのかと思い、東北の人の強さを知りました。

最初は中途半端な気持ちでの参加だったけど、自分の目で被災地を見て現地の方々の優しさや温かさに触れて、ボランティアに参加して本当に良かったと思いました。また、様々な地域からの他大学の方ともたくさん交流し、色々な意見を聞いたのもすごく良い経験になりました。ただ行って活動して帰ってきただけでは意味がないので、家族や友人に被災地の現状や、活動を通して感じたことを伝え、自分もまだまだ継続して支援していきたいと思います。

自分のためになった1週間だったと同時に、少しでも自分が被災地の復興に協力できた1週間なら嬉しいです。月並みのことしか言えませんが、現地の方々や教職員の方々、他大学みなさんも含め、本当に感謝の気持ちでいっぱいです。特に、今回1週間一緒に過ごした第7クールみんなにはすごく支えられ、様々な考えに刺激されました。最初は散々悩んだけど、プラスばかりの1週間でした。ありがとうございました。

社会学部 宮本

私が今回のプロジェクトに参加した理由は、震災直後、被災地のために何の力にもなれなかったという悔しさが強く心に残っていたからです。ボランティアとして、微力でも貢献した結果を置いてきたいという気持ちで臨みましたが、後から考えると、たくさんの事を学ばせて頂き、持ち帰ってきたものの方が多いように感じます。メディアの報道だけでは伝わらない大部分を、自身の五感で感じとれたことは大変貴重な経験になりました。

気仙沼で地元の方と一緒に作業をしたときに、当初はボランティアを頼まず、ひとりで片付けをしたというお話を聞きました。誰よりも作業を頑張っていた姿からも、気仙沼地区に対する強い思い入れが伝わってきました。

私はボランティアの期間が終われば元の生活に戻ります。しかし、気仙沼の方々にとってはそこが生まれ育った土地で日常であり、重く辛い現実を受け止めなくてはなりません。そんな状況の中でも、ボランティアの全くの他人である私たちに気遣いをしてくださり、本当に暖かい方々でした。

陸前高田を観に行かせていただき、今までにない衝撃を受けました。本来の姿を知らなかった私には、昨日まで住んでいたひとつの街が、なくなったとはどういうことなのか、想像もつきませんでした。

復興にはとても長い年月がかかります。しかし、少しずつですが確実に前に進んでいるという印象を受けました。東京にいても被災地のことを忘れることなく、支援を継続していくことが何よりも大切なことだと思いました。

また、今回様々な人々と関わる機会を持てたことが、自分自身を成長させてくれたと思います。気仙沼の方々をはじめ、他大生やボランティア団体さんとの交流で、自分の世界を広げることができました。このプロジェクトをサポートしてくださっている総ての方々に感謝したいと思います。ありがとうございました。

社会学部 小松

今回の被災地ボランティア現地活動に参加する前は、こんな自分に何が出来るかと不安でいっぱいでした。しかし活動を終えた後、感じたのは、どんなに小さなことでも被災地の為になればという気持ちで取り組むのが大切だということでした。

活動を行うときは、今何が出来るかを常に考えて、体力のペース配分をしながら、行動することが必要です。作業は大変でしたが、他大学とも仲良くなれ、良い雰囲気での活動が出来たので非常に良かったです。

活動中、被災者の方とお話することも多いので、気持ちに寄り添い、表現に気をつけながら会話をすることは大事なことです。

社会学部 内田

私がボランティアを行って、一番印象に残っていることは南三陸町の防災対策庁舎です。町長がアンテナにしがみついて生き残ったというニュースで有名な建物です。ニュースや新聞で見たときは、客観的に津波の破壊力に驚きを感じているだけでした。しかし、実際に南三陸町の様子を見たとき、もちろん町の風景にも言葉を失い唾然としましたが、庁舎を目の前にしたとき、私は「恐怖」以外何も感じるできませんでした。この感情は言葉では説明できないので、ぜひ訪れて「何か」を感じてもらいたい場所です。そして、注目してもらいたいのは庁舎の前に置いてある花束や写真、そして悲痛な訴えが書いてある手紙です。この庁舎を津波の悲惨さを忘れないように保存する動きがでていますが、庁舎の前においてある手紙は「こんな建物のせいで息子は死んだ」「建物を壊せ!」という内容でした。その背景には、高台への町役場新庁舎建設を行わなかったこと、6メートルの津波と3メートルを超える浸水深が想定されていたのに、3階建ての防災対策庁舎に職員を集めたことなどがあります。

ボランティアで被災地の人を支援するだけではなく、実際の現場を見たり、地元の人との交流を通して生の声が聞くことも大変重要なことだと思います。このような大変貴重な経験ができて、本当に嬉しく思います。

国際学部 相原

私がこの活動に参加しようと思った動機は、未曾有の大震災による被害をメディアからしか知ることができず、どこか現実味がなく自分自身で感じたいと思ったこと。そして、言葉にするのは簡単だけど、被災者のために自分に出来ることを、今出来ることをして、直接触れ合いながら何か役に立ちたいと思っていたことがきっかけです。

今クールはニーズが多かったためほとんどの学生が毎日活動に出かけました。私は清掃作業やアンカー作り等体力を必要とする仕事に参加させていただきました。アンカー以外は、場所は変わってもやることはほとんど同じで、ボランティアに出来ることの限界を感じた気がします。しかし、その一つ一つの小さい作業も誰かがやらないと元の生活レベルに近づくことはできないし、清掃作業をしていくなかで見つかる日用品等を見ると、今は何もないこの場所で人が生活していたんだなと実感し、震災の恐ろしさ、被災地の苦しみを忘れてはいけない!と痛感させられました。震災前の町の様子を知らなかったため、何も考えずに被災地をみると、元々建物がない田舎かなと捉えることもできます。ですが震災前後の写真を比較すると一目瞭然で、ボランティアに行く前に被災する前の町の様子を知っておくべきだったと反省しました。

今回の貴重な経験と感じたことを忘れずに、今後の自分に活かしていきたいと思います。また、自分に出来る形で被災地支援を続けたいと思います。この活動に参加して出会えた方々と機会を作ってくくださった方々に感謝の気持ちでいっぱいです。ありがとうございました。

社会学部 大久保

私がボランティアに参加した理由は、夏休みであるのに何もすることがなく、なにもしないで夏休みが終わるのがいやだったからです。時間があるのなら、ボランティアに行こうと思いました。失礼だと思いますが、安易な気持ちでの参加でした。

被災地を自分の目で見るのは初めてでした。そして、見たときの印象は約半年がたつのに震災後の風景とほぼ変わってない。それと同時に半年という短さ、この先の復興の道のりの長さを感じました。自分がこの活動中に一番印象に残っているのは、家が流されたところに何かを探しに来ている人の姿です。そのような被災者や建物のない被災地を見てから、自分の気持ちの中に引っ掛かるものがあります。

ボランティアが終わり自分なりに今回の活動について振り返る時間を設けました。その結果、自分の中にあるモヤモヤとした気持ちはよりモヤモヤとなりました。それは、今回の1週間で側溝の清掃やアンカーを作ったという結果はありました。しかし、復興するには年単位での時間が必要になるのにもかかわらず、たかが1週間では現地の人の活動量・活動時間の1%にも満たない。そして、自分たちには失ったものはなく、なんでも揃っている家・帰る場所がある。とてもやりきれない気持ちです。ボランティアに行ったことに意味があると思いきみたい自分がいます。帰ってきてから1週間が経ちますが、今でも被災地のことが頭をよぎります。自分には背負うことができない何かを持って帰ってきた気がします。

ボランティアとは、他人のためにするものと思っていました。しかし、今回自分が行ったボランティアは自己満足ではないかと思う。普段ならこんなに悩むことはないのに今回だけは、ずっと引っ掛かるものがあります。ボランティアとは何かということが分からない。ボランティアすることに意味があるとも断言できません。それでも、機会さえあればまた行きたいと思います。また、被災地に行く事だけがボランティアではないと思うのでなにかしら行動していきたいと思います。そして、このモヤモヤの答えみたいなものが見つかればと思います。

今回このような経験をさせていただく機会を与えてくださった様々な方へ簡単に申し訳ないですが、この場を借りてお礼を申し上げます。ありがとうございました。

法学部 栗田